図書だより

〈第16号〉
昭和62年2月28日
呉工業高等専門学校
図書委員会

呉市中央図書館

目　次

〔読書感想文〕
「葡萄が目にしみる」（林　真理子）…… 4C　山根　正和 … 2
「鼻」（芥川　龍之介）…… 4A　別府　正徳 … 3
「原子力発電」（武谷　三男）…… 3M　平田　豊 … 3
「あすなろ物語」（井上　靖）…… 3A　澤田　信恵 … 4
「鼻」（芥川　龍之介）…… 1E　河本　英二 … 5
「走れメロス」（太宰　治）…… 1M　喜多村　博 … 6
〔ギリシア三大哲学者を読む〕
「クリトーン」（プラトーン）を読んで
—よく生きることの大切さ— …… 2M　山口　紀昭 … 7
—ソクラテスの死と自分— …… 2E　児玉　幹夫 … 8
—生きる！— …… 2C　下久保慎祐 … 9
—どう行動するか— …… 2A　市川　京子 … 10
〔郷土の自然〕
芸南地域の花崗岩地形 …… 一般科目教官　佐々木卓也 … 11
〔随　想〕
1840年待ったボアディシア王妃 …… 一般科目教官　石井　淳二 … 13
〔図書館を訪ねて〕
呉市中央図書館 …… 図書係長　土佐　智義 … 15
図書館業務電算化のその後 …… 図書主任　藤井　健 … 17
寄贈図書のお知らせ …… 17
書名目録と著者目録の利用方法（利用案内シリーズ3）…… 18
新着図書案内 …… 19
編集後記 …… 23

読書感想文

「葡萄が目にしみる」
（林 真理子）

4C　山根正和

葡萄づくりの町、地方の進学高校を背景に、日常生活を描いた青春小説で、筆者の人生観が、いや苦しい人生経験にも似たリアルなものを感じた。

葡萄畑、プールサイド、花火、野球場、図書館、初雪、アイスクリーム、窓の雪と第一章から第九章までで構成されている。乃里子というきずつきやすく、憶病で真面目な主人公からみた世界を描写した。しかも正確に細かく。

どうしてこんな小説に感動したかというと、ぼく自身似た経験をしたことがあるように思えるからだ。たしかに、このような誠実さはないが、大なり小なりこのような経験をしたことのある人は多いと思う。そこがこの作品のよさだと思う。それだけに哀感は大きいと思う。ここでの主人公の感性はどんどん進化している。希望とか願望も生まれているからだ。しかし感性が進化すればなお哀感も増していったように思う。

主人公の乃里子は、美しい少女でなく広い心もない。この小説にでてくる少年がいて彼女を不遠慮に見る。少年の軽い失望が走る。こんな表情をされると頭にくることはとうぜんだ。しかし乃里子は慣れているのだ。何ともないではなく慣れているのだ。また乃里子と正反対の真知子と恵子が登場するが、この二人は、俗に言うミーハーで、男の友達も多い。乃里子から見れば別世界のように思えたにちがいない。また友達には恵まれた感じに見えるが、実は一人だったのではなかったのだろうか。二人で抱き合って感動した親友であったはずの祐子のうらぎり、乃里子の美しい誤解だったのかと思うととてもさみしくなる。なんといっても一番の身近の人が実は鬼っ子だったのだから。

この小説は、読者に問題提起を一度もしなかったがよく考えればただのいなかの日常生活の描写だけで構成されているのだからあたりまえであるが、つまり乃里子という名をかりて作者（林　真理子）自身の人生観を描写し、全身でうけとめてほしいと考えたのではないだろうか。問題は読み手の人生観にてらし合わせて考えればよいのでしょう。

この作品によって作者の核が分かる。そこに儚（はかな）くも弱い存在である人間があり、そして、その暗から明への飛翔の姿を垣間見た。作者の虚実入りみだれの人生のどろどろとしたところをくぐり抜けて、移ろいやすい人生存在そのものの儚さを知ればこその痛切な思いがこの作品に感じられる。

この作品のエンディングは、決してハッピーエンドではない。乃里子に与えられた問題はもっと大きくなっているように思える。作者自身、人生問題を拡大しているようにも思える。と同時自分自身の人生観とてらし合わせると、読めば読むほど自分の問題として、深められるようだ。

人生に結論はない。こんなことを考えてもしかたがないといえばそれまでだが、しかしそれではなんの進歩もないし、いつか一流人としての道を開くことができると思うのだ。

○「図書室では静粛に」

○「読んだ本はもとの位置へ」

○「帯出期間を守ろう」

○「図書室での飲食はやめよう」

「鼻」
（芥川　龍之介）

4A　別府正徳

主人公の僧内供は、醜い不格好な鼻を持ち、それに傷つけられる自尊心に苦しむ。鼻が少しでも小さく見えるような顔の角度を研究したり、様々な薬を試したり等、消極的あるいは積極的努力をする。そして遂に湯に鼻をつけ、ゆだった鼻を人に踏ませるという、単純かつ屈辱的な方法で鼻は普通の形になる。

そこで内供は「これでもう笑う者はあるまい」と思うわけであるが、しかしこれが甘い。普通の鼻になった彼を見た者は笑いをこらえることが出来ない。

これが作者のいう「傍観者の利己主義」である。本文を引用する。――人間の心には互いに矛盾した二つの感情がある。勿論、誰でも他人の不幸に同情しない者はない。ところがその人がその不幸を、どうにかして切りぬける事が出来ると、今度はこっちで何となく物足りないような心持ちがする。少し誇張していえば、もう一度その人を同じ不幸に陥れてみたいような気にさえなる。そうしていつの間にか、消極的ではあるが、ある敵意をその人に対して抱くような事になる。――

この事に気付いた内供は、今度は普通の鼻を恨めしく思う。ある朝、内供の鼻は昔どおりの不格好な鼻になり、彼ははればれとした心持ちで「これでもう笑う者はあるまい」と思うのである。ここで終わっている。

内供はこれで幸福だと思っているが、この後も彼は「傍観者の利己主義」から来る優越感による同情を浴びていかなければならない。鼻自体は醜く不格好で何も変わっていないし、傍観者の精神も何ら変化はないわけであるから、事態は全く進展していないのである。

それを考えてみれば、この内供の幸福感は、環境に負けて妥協した事によって生じたものにすぎない。

この後も内供は、以前同様苦しみながらも、それを直そうという努力はしないで、それに妥協していかなければならないわけだ。これで果たして幸福だといえるだろうか。

鼻の形の良し悪しは、ここでは大した問題ではないと思うが、不幸に悩み、様々な努力の末、屈辱も甘受して目的を果たしながら、それを捨て去ってしまうというのは残念な話である。「傍観者の利己主義」はどうであろうが、克服した不幸を再び招き入れて喜んでいるのでは問題解決出来ない。

一方、「傍観者の利己主義」であるが、僕自身の経験でも、不幸を乗り越えた人に対して、いくら意識で抑えようとしても、心のどこかしらで恨めしく思う気持ちが存在することを感じずにはおれない。

このように感じるということは、自分自身の内に乗り越えずにいる不幸が、また存在する為ではないだろうか。そしてまた、環境に妥協して不幸を乗り越えずにいる内供に、自分自身がなっている為ではないか。

この小説はここで終わっている。確かに、これから先の内供の人生に、小説にするだけの価値はないだろう。ということは、不幸を乗り越えようとせずにいる自身の人生にも、何の意義も存在しない事になる。

出来る事ならば、目的を果たす為に努力を続ける、先の内供の様でありたいと思う。

「原子力発電」
（武谷　三男）

3M　平田　豊

はじめにこの本の紹介ですが、この本は主に原子力発電がもたらす害について述べてあります。順を追って説明すると、まず最初に原子力発電をすると必ずついてまわる「死の灰」のこと、次に簡単な原子力発電のしくみ、次に日本、アメリカにおける原子力発電の色々な事故についてのこと、そして最後に、故障、事故の多い原子力発電は本当に必要なのか、という大まかですが、このようなことが書かれています。

次に感想ですが、この種の本は興味があるのでこれまで何冊か読んできましたが、この本ほど色々な事故、欠陥が詳しく書かれているのはなかったと思います。さて、その事故のことですが、原子力発電というものは小さな事故でも、処置が悪かったり手間どってしまうと、大変なことになってしまいます。原子力発電では常に放射能と死の灰がつきまとっています。冷却水がもれただけでもそれに放射能や死の灰が含まれているので、環境汚染や人体に多大な影響を与えてしまいます。放射線が人体に与える影響は、主に白血病、が

ん、遺伝子の突然変異などがあげられます。特に遺伝子の突然異変では、次に生まれてくる子が遺伝病になってしまうのでかわいそうです。このような放射線を出す物質は、カルシウムのように、人体に吸収されやすい物質と同じような性質を持っていて、体内に入ると吸収されて、骨などに沈着し、長い間にわたってその部分に放射線をあてつづけてしまいます。

このようなことは、原子力発電所が一度大きな事故が起こって死の灰が吹き出されればたやすくおこります。もしこのようなこと、つまりソ連の原発事故のようなものが起こったら日本では原発と市街地が近いので、死亡はまぬがれたとしても、確実に市街地全体が放射能で汚染されます。

この立地条件の違いは、事故の際の被害の量に影響してきます。日本は、はっきりいってまわりに何もないという所がありません。だから市街地の近くに作るのは仕方がないのかもしれませんが、もしソ連の原発事故のように大きな事故が起こったらどうなるでしょう。ソ連は死者はあまりいませんでしたが、日本の場合、すぐ近くに原発がより集まっているので、また、人家が近いので、確実に死亡する人が多数出てくるでしょう。

さて、次に死の灰と高レベル廃棄物の処理ですが、現在、ドラム缶のような形の強度のすぐれたタンクに貯蔵するしかありません。ガラスに封入するという方法も開発されてきていますが、量が量なのでためるしかないでしょう。しかし、地震などでそれがもれる可能性も大いにあります。

原子力発電で得るものは大きいかもしれませんが、まずそれから出る廃棄物の処理を開発するべきではないでしょうか。

「あすなろ物語」
（井上　靖）

3A　澤　田　信　恵

この物語は、鮎太という少年の成長していく様子と鮎太に関わった人々、特に女性のさまざまな状況などが書かれている。まずは、この物語の題であり、また、鮎太やさまざまな人々の心にあるあすなろ（羅漢柏）のことについて少し。

あすは檜になろう、あすは檜になろうと念願しながら、ついに檜になれないという、あすなろ（羅漢柏）の説話。誰でも一度は持つ感情、その美しくもあり哀しくもある説話を、作者が小説という形で取り扱った。この物語は、鮎太の幼少年時代、青年時代、社会人としての門出の頃、やがて戦争から敗戦後までの壮年時代というように、年代順、鮎太の成長過程のそれぞれの時期から六つの物語から成り立っている。

まず、幼少年時代のことを書いた「深い深い雪の中で」では、祖母と自分だけの二人の生活の中に、祖母の身内である冴子という美貌の少女の出現。そして、冴子から人間としての愛について初めて教えられたこと。鮎太は、父が軍医として任地を転々としていたため、祖母おりょうと土蔵で生活していた。土蔵で生活しているとは言っても、貧しいため土蔵に居た訳ではなく、大きな屋敷は天城営林署に貸してあり、そこの代々の署長官舎のようになっていた。鮎太の祖母おりょうは、本当の祖母ではなく、先代の妾であったが、先代の死後、後妻という形に戸籍を書き替えてしまった訳であった。だから家の人々にも村の人々にも好かれてはいなかったが、鮎太にはやさしい祖母であった。突然、現われた冴子は、田舎の村人とは、違ったあつかいを鮎太にした。村人は、〝梶の坊ちゃん〟と他の子供たちとは区別されていた。だが、冴子は梶家に対してよからぬ感情を、もちろんそれは、自分の伯母を梶家の犠牲者と思い込んでいる感情があったため、他の者とは違った扱いをしていた。

そんな冴子は、ある大学生と親しく鮎太もその青年とは、彼女の使いとして何度か逢っていた。そんな二人が深い雪の中で心中してしまった。それは幼い鮎太には、強いショックとも言うべき出来事であった。こ

れによって鮎太にとって冴子は、美しい姿のままで一生残ったことだろう。そして、このことが鮎太の一生を通しての恋愛に対してのイメージというか、感じ方を決めてしまったとも言えるのであろう。

その後、きびしい中にもやさしさを秘めた雪枝。青春のゆえ迷い、その中で学生たちのあこがれ佐分利信子。清香という女性との幻想的な一夜。そして最後に、平凡なというか不本意ともいうべき結婚をした鮎太がオシゲという正体不明の浮浪児とも言える奔放な女性との一時的な関係。少年時代は誰でも、ひのきになろう、なろうと夢みていたが、現実はひとにぎりの人間しかひのきにはなれない。そんな哀しい現実があるからこそ、この物語ができたのだ。

「鼻」
（芥川　龍之介）

1E　河本英二

「鼻」という小説は、鼻が五六寸(15～18cm)もある和尚の物語りである。その和尚は、いつでも自分のアゴの下までもある長い鼻を苦にしていた。その訳は当然の事ながら恥かしいし、また不便などがあったためである。ごはんを食べる時などは鼻が邪魔で弟子の僧に板で持ち上げてもらわなければならなかった。そしてある日、弟子が長い鼻を短かくする方法を聞き、それを行うと、本当に鼻が短かくなったのだ。しかし、人に笑われる原因だった鼻が短かくなったのに、以前にもまして、人々は和尚を笑うのである。そしたら和尚は、またあの長い鼻にもどりたいと思い始めた。すると、またあの五六寸もある鼻にもどったのである、といった内容である。

この「鼻」は今昔物語から芥川龍之介が出典し書いたものだ。よって文章や言葉づかいが難しいと思った。しかし、何度も読むにつれて、主人公である和尚の表の心と裏の心があるという事に気付いた。表では仏の教えを説く立場だから、姿形など気にしていない、というふうに自分を見せている。これには僕も同感だ。そして、同情もする。また裏では、こんな鼻はイヤでイヤで恥かしくてしかたがないという気持ちがある。僕はこの裏の心があたりまえで、僕も同じ立場ならそういう気持ちになるだろう。このように主人公は表と裏の心があり、その2つがぶつかり合う所におもしろ味がある。

それから、もう一つ主人公の心の変化である。粗筋にもあったが、長い鼻の時より、短かい鼻の方が和尚を見て、面と向って笑いだした。これは、人というのは他人の不幸に同情しないものはいない。しかし、不幸だった人が不幸でなくなると、もう一度その人を不幸な目に合わせてやりたいという、みにくい気持ちがあらわれてくる。だから、この普通の鼻になった和尚を幸せな気持ちから、もとの不幸な気持ちにするために、和尚を見た人々は逆に笑いとばしたのだろう。そうすれば、幸せをうばわれた和尚を以前以上に不幸な目に会わせれるわけである。これが、和尚を笑った理由だろう。この和尚をなぜ笑ったのかが、なかなかわからなかった。しかし、読んですぐわかるよりも、読者に想像し考えさせてくれるところが、この小説のすばらしさだろう。

それから、この「鼻」は短い。しかし、この短い小説の中にもしっかりとした柱になるものがある。それは、「他人の目にうつる自分に始終注意をひかれるのみで、人生の満足、不満足も、要するに対世間的なものにすぎないという懐疑的な精神」である。この柱を中心として、人のわびしさを描いたものがこの小説であろう。ここで僕は、この人生の満足、不満足も対世間的なものでなく、自分自身の満足、不満足を求める精神をこの和尚にもってもらいたい。また僕も自分の正直な心で、満足、不満足を味わいたい。そうする事によって本当の〝幸せ〟に出会えるだろう。このような事を気付かせ、教えてくれる「鼻」は、推理小説などのような爽快さと違ったものを感じさせてくれた。

だから、この小説は夏目漱石に絶賛され、芥川龍之介の出世作にもなったのだろう。

「走れメロス」
（太宰　　治）

1M　喜多村　　博

僕がこの作品を読んでみようと思ったのは、以前、「人間失格」という作品を読んだことがあるので、同じ作者の作品を読んでみようと思ったからです。この作品を読んで思ったのは、「人間失格」と「走れメロス」とでは、同じ作者のものとは思えないほど感じが違いました。「人間失格」は、暗く、重苦しい感じだが、「走れメロス」は人を信じる大切さを教えるもので、変な言い方かもしれないが、明るく、生き生きとした感じがしました。

メロスは、妹と二人で暮らしています。このたび妹が結婚することになったので、そのための品々を買う為に、シラクスの市にやって来た時、街の様子を怪しく思ったので、老人に尋ねてみました。すると、ここの王は、人を信じることができなくなり、皇后や妹、世嗣など多くの人を殺したというのです。それを聞いたメロスは怒り、王城に入っていきました。メロスは捕縛され、王の前へ引き出されました。そして処刑されることになりました。しかし、妹の結婚式を挙げるために、三日間の日限を与えてくれるように頼み、身代わりに親友のセリヌンティウスを呼びました。彼は無言のまま首肯し、メロスをひしと抱きしめました。もし僕がセリヌンティウスと同じ立場に立たされたら、彼の様にここまで友を信じ、身代わりになることが出来るだろうか。また、メロスと同じ立場に立たされた時に、セリヌンティウスの様に信じてくれる人がいるだろうか。人に信じてもらおうと思えば、まず自分が人を信じなければならないと思うので、もっと人を信じるようにしなければならないと思う。これは皆にも言えることだと思う。

それからメロスは急いで村に帰り、妹の結婚式を挙げました。次の朝、メロスは、友人の待つシラクスの市へ向かって走り始めました。そうしていると川の前に出ました。昨夜の豪雨のために、川は激流となり、橋を破壊してしまっていました。しかし、メロスは、友のために覚悟をきめて川の中に飛込みました。そうして、やっとのことで対岸に着き、先を急ぎました。障害はこれだけでなく、王の命令で山賊が命をねらって来たりもしました。それでもメロスは先へ進みました。しかし、さすがにメロスも疲れて、動けなくなってしまいました。身体疲労すれば、精神もともにやられてしまいます。もうどうでもいいという、勇者に不似合いな、不貞腐れた根性が心の中に巣喰った。死んで友に償おうか。いっそ悪徳者として生き伸びてやろうか。というようにまでなってしまいました。

こういうところを見ると、メロスを悪い者のように思ってしまうが、僕だって同じことを考えるかもしれない。しかし、身代りになってくれている友のためにも、頑張らないといけないと思う。

そうしていると、ふと、水の音がした。メロスは、水をひと口飲むと、夢から覚めたような気がして、信じてくれている友のために、また走りだした。メロスは、二、三度口から血が噴き出たが走り続けた。陽はゆらゆら地平線に没し、まさに最後の一片の残光も消えようとした時、メロスは疾風のごとく刑場に突入した。そして、やっとのことで親友のセリヌンティウスを助けることが出来ました。

この作品で、作者は、人を信じる大切さ、素晴しさを教えようとしているのだと思います。これは、今の世の中でも、とても大切なことだと思います。皆が、互いに信じ合えば、もっともっと良い世の中になるんではないでしょうか。

○「図書室では静粛に」

○「読んだ本はもとの位置へ」

○「帯出期間を守ろう」

○「図書室での飲食はやめよう」

ギリシア三大哲学者を読む

「クリトーン」(プラトーン)を読んで

― よく生きることの大切さ ―

2M　山口紀昭

まずはこの本に書かれている内容について述べる。この本の形式については、ソクラテスとクリトンとの対話文になっている。まず、おおまかな内容であるが監獄にとじこめられているソクラテスに、竹馬の友であるクリトンが脱獄をすすめていくが、ソクラテスは哲学的に考えて、最後に毒杯をあおいだというものである。

監獄にとじこめられているソクラテスを、クリトンは朝早くたずねた。そして、例の船（アテーナイ人たちが、デーセウスの誓いによって毎年デーロス島の聖地に向け、祭典使節団を派遣するための船で、この船がアテーナイに帰着するまでは公の死刑は一切おこなわれない）が今日あたり戻ってくるのではないかと知らせた。しかしこの船が戻ればソクラテスの生涯における最後の日は次の日、つまり明日ということになる。だがソクラテスは、そのことをありがたい仕合せだと言っている。クリトンはソクラテスに脱獄をすすめることになる。それは金銭でここから出してやり、身の安全まで考えられたものであった。さらに大多数の思わくも気にする必要があるとか、息子たちへの扶養の義務があるとか、すべて納得のいくようなことばかりだった。しかしソクラテスは大多数の思わくは気にしなくてよい。なぜなら彼らは人を賢くすることも愚かにする能力もないと説いた。さらにその彼らの行動はその場かぎりのことだと言った。これはこういうことである。多数の思わくよりむしろ、ただ一人でももし誰かそれに通じている人があるなら、その人の思いなしに従い、この一人の人を、他のすべての人々以上にもっと恐れ、その人の前に恥じなければいけないというのである。そして、不正について述べられているのであるが、これは、たとえ不正な目にあったとしても、それを不正で仕返ししてはいけないというのである。考えてみるとこれこそ「ただ生きる」ではなく「よく生きる」ことなのである。国家に対してもそのことが述べられている。これはソクラテスのことばなのであるが、国家でさだめられた法律や裁判をもし、「脱獄」という形で破るなら、これはポリスに対する最大の暴力である。かつて両親が生まれ、育ち、結婚し、この世に生を受けたソクラテスは、アテナイの国を愛し、そしてアテナイの法律を愛した。そのアテナイでくだされた判決だからしかたがなかっただろう。かくて不正という形で監獄に入れられ、死刑の判決を受けた。しかし、ここで脱獄すれば不正を不正で仕返しするということになる。よって不正をおかさないために、クリトンの説得もむなしく毒杯をあおいだのであった。

次にこの本を読んでの感想であるが、僕は、ソクラテスは自分の生命を犠牲にしてまでも正しく生きようとしたことは、とてもすばらしいと思う。ソクラテスだって本当はもっと生きてていたかっただろうと思う。クリトンが脱獄をすすめてくれた時は、本当に嬉しかったに違いない。それでも、ソクラテスの考えの原則である、「ただ生きるのではなくて、よく生きる」を目ざして、死の道をえらんだのだろう。自分がこの地アテナイが好きだから、そのポリスやポリスの法に暴力を加えなかったのだ。

僕は他にも、クリトンのことばにも感心させられた。自分の「竹馬の友」であるソクラテスのことを考えて、あれだけのことを考えて脱獄をすすめていたのだからすごいと思った。僕なら、友達を救うのにお金を出してあげたり、身の保障まで考えてあげられたりはしないだろうなと思った。

最後にまとめとして、僕だったら自分の命をすててまでも正しく生きようとはしないだろうと思った。まさに「命あっての物種」という生き方である。よく新聞などで、海でおぼれている人を助けようとして、自

分も力つきて死亡したという事件があるが、あれでいいのだと思う。かと言って死のうなんてことは思わないが、これだって正しく生きようとしての結果なのだから。

―ソクラテスの死と自分―

2E　児　玉　幹　夫

この『クリトン』は、ソクラテスに死刑の宣告があった後、獄中においてソクラテスとその忠信なる老友クリトンとの間に交わされた対話から成っている。

なぜ、ソクラテスが死刑の宣告を受けたのかということは、『ソクラテスの弁明』からもわかるように、ソクラテスの行動は、有力者たちの無知をあらわすことになったので、その言動は一部市民の間に強い反感を生み、やがてそれは神々を信じずかつアテナイの青年を腐敗せしめたとの罪名でその宣告を受けたのだ。しかし実際ソクラテスは深く宗教的な人であり、また青年と対話することで青年を向上させたのである。このような不正な死の宣告を受けたにもかかわらず、ソクラテスはそれを自らの主義に従って受ける。

親友であるクリトンは、ソクラテスにソクラテスの妻と子供の扶養と教育の問題、逃亡に必要な金銭の問題などを挙げて脱獄を説得している。このクリトンは自分の地位も名誉も財産もこのソクラテスの逃亡のために投げすてようとした。いかに親友だからといって、これほどのことが決意また実行できるだろうかと思う。また、こんなことができる親友にならなければならないし、こんな親友を持ちたいものだと思う。

しかしソクラテスは、この親友クリトンに深く感謝しながらもやはり死を選ぶ。いくら死ぬことに恐怖を感じないとはいっても、愛する妻子を残して死ぬことができるものかと思う。僕はまだ妻子を持ったことはないが、死ぬことよりも妻子と共に暮すことの方が幸せであろうと思う。ソクラテスは、「僕は今が初めてではなく常々も熟考の結果最善と思われるような主義以外には内心のどんな声にも従わないことにしているのだから。そういうわけでさきに僕の主張した主義は今僕がこんな運命に陥ったからといってこれを抛棄するわけにはいかない。」と言っている。いかにそれが本当に正しいことだといっても、自分が死ぬという立場に立たされてもこういうことが言えるというのはすごいとしか言いようがない。いくらソクラテスが唱えるように死ぬことが恐ろしいことか、楽しいことかわからないのに、それを恐れてはいけないと言われてもやはり死ぬということは恐怖である。誰も人が死んで喜ぶというやつは普通いない。誰もがそのひとの死を悲しむものである。また、ソクラテスは「人はどんな場合にも不正を行ってはならない。」「人はまた不正に報いるに不正をもってすべきでもない」と言いポリスの不正な裁判、判決に対して脱獄というポリスとポリスの法に対する暴力で報いてはならないと言っている。しかし僕は場合によっては、あのハムラビ法典のように「目には目を、歯には歯を」という考え方、行動をとってもよいと思う。

この『クリトン』は後半からソクラテスとクリトンではなく、ソクラテスとポリスの対話のようなかたちになっている。ここでソクラテスは「法の決定が個々人の意志によって左右される如きポリスは1日も存在することはできない。たとえ法の決定に不正なことがあってもなお国法ないし国家には市民の服従を要求すべき2重の権利があるのである。第一に結婚や生児の扶養と教育を司る法律は実際各市民の両親であるといっても過言ではなく各人は国法の保護の下で合法的に市民として生れて来たのであり、かつ法に教育されて市民権を行使する能力と資格とを獲得したのである。要するに私の今日あるのは、ポリスの法のおかげであるといわねばならない。市民はポリスとポリスの法に服従すべき義務を負っているのである。また第2の権利として成年に達した市民は、ポリスの法を尊重するという無言の契約を結んでいるのである。それは移住の自由を法によって認められているにもかかわらず、祖国に留まるがために服さねばならぬ義務を自覚する年齢に達してなおそこに留まることを選ぶならば私は事実上それらの義務を果すべきことに同意したわけである。従って私にはそれらを忠実に遂行する責任がある。故に、ポリスとポリスの法に不正を加えてはならない。」と言っている。ソクラテスの言うことは、確かにその通りだと思う。しかし、それに、例外というものはないのだろうか。特に生死の問題についていうかぎりでは例外があってもいいのではなかろうかと思う。

「例外のない法はない」という言葉を聞いたことがある。しかしソクラテスは、自分の主義に従って自分の意志で死を選んだのだから僕が今どうこう言うべきことではないかもしれない。むしろソクラテスは生涯かけて捜し求めた人生の真実に最期まで忠実であろうとした自分の信念を最期まで貫いたすばらしい人である。僕は、すぐ甘い誘惑に負けてすぐ楽な方に妥協してしまい、つらいこと苦しいことは人におしつけてばかりで、ソクラテスのように善く生きるということをしていない人間だ。よく知らないことでも、みんなの中にいると見栄をはりたくなるし、話も合わせたくなる。そうすることが、よけいに自分をみじめな思いにさせることになるのだと思う。ソクラテスのような偉大な人物にはなれないが「単に生きるのではなく、善く生きる」ことはしたいと思う。

―生きる―

２Ｃ　下久保　慎　祐

「クリトーン」は、プラトンが登場人物ソクラテスによって対話編で描いた作品である。

ソクラテスは青年に対して有害な影響を与え、国家の認める神々を認めず別の新しいダイモーンのたぐいを祭るという理由で告訴された。

そして処刑が一両日後に迫った日の朝まだき、ソクラテスの幼い頃からの親友であったクリトーンは彼のもとを訪れた。

獄吏を買収してソクラテスをテッサリアへ逃すためであった。後はソクラテスを説得するだけだったがこうして開かれた牢獄の門をぬけて国外に出て行くことを彼は肯(がえん)じなかった。それがなぜであるかを明らかにしたのが「クリトーン」である。

この作品の中でクリトーンが非常なほどソクラテスを逃がしてやりたいんだという気持ちがよく伝わってくる。本当の友人だとつくづく思った。

いろんな手段をクリトーンはソクラテスに対してとったが全てかわされた。確かにソクラテスは、偽つまり不正はよくない、正を青年たちに教授してきた。不正なことは全くしてないのだが、悪徳な有力者、ソフィストによってこじつけのぬれぎぬを着せられた。

ここでクリトーンは、ソクラテスに子どもを見すてようとしているんだ、孤児にしようとしているんだ、教育する義務があるんだぞといっても、ソクラテスは強い「善く生きる」という意志ではねかえした。更にクリトーンは、君がそんなことをしたら自分が無能に思われる。そして、男らしさに欠けていると思われる。ここは、「自分をたててくれ、ソクラテス君」と非常な願いも届かなかった。

私ならソクラテスのような行動はとれないのではと思う。自分のために犠牲者をだしたくないからである。しかし、こんな人間ばかりいたら世の中は力があるものに押さえられて進歩しなかったと思うからやはりソクラテスは偉大な哲学者だと思った。

彼は結局、自らの根本原則“不正を行わない”ソフィストたちに不正を行われたが、国に不正してはいけない、不正で返してはいけないによって死の道を歩んだが彼にとっては、自分の“善く生きる（不正を行わない）”をまっとうしたので悲しい死ではなかったのである。

自分も“ただ生きる”のではいけない“善く生きる”ということ、つまりどうやったら“善く生きれる”のか考えてみるべきだと思う。なぜなら失礼だけど岩根先生が紹介された身体障害者の方は、スポーツ万能だったが、ちょっとしたことで手足が動かなくなり、最初は、何もかもがいやで他人も同じ目にあえばいいのにと思っていたが、口で筆をかみ精いっぱい絵をかき何年もかかって、首から上だけで個展を開かれた。これは、母にも何年前か、この人がまだ“絵を描きはじめたんです”というころに聞かされたことがあったけどすごいと思う。自分たちは無気力すぎると思った。

―どう行動するか―

2A　市川京子

この本「クリトーン」の本は、ソクラテスとクリトーンの対話の形で書かれている。

この本の内容は授業で習ったように、獄中にいるソクラテスの所に竹馬の友クリトーンがやって来て、ソクラテスに脱獄、逃亡の懇願する。

その懇願に対してソクラテスはこれまでの生き方の原則をクリトーンに示し、その結果脱獄するべきではないと説き、静かに毒杯をあおぐ道を選ぶというのがおおまかな内容です。

クリトーンの説得の内容は、一つは「よくは知らない大多数の人たちに僕は金銭をつかう気になれば君を救うことができたのに、友人よりも金銭の方が大事だから君のことを構いつけなかったように思われるだろう。」とこれは、授業で習った言葉を使えば世間の評判からこれに対してソクラテスは、「彼らは人を賢くすることもできなければまた愚かにする能力もありはしない。彼らのすることは、何にしてもその場かぎりのことなのだよ。」又「一般に行動はその道の専門家である人を監督に仰いで、その人の思いなしに従わなければならないのであって、それ以外の人たちは、これを全部合せても、その思わくはこのただ一人のそれに及ばない。」とソクラテスは大多数の者の思わくを気にする必要はないと説いた。

次に、クリトーンは「君は君の息子さんたちを見すてようとしているように思われる。君は扶養し、教育してやることができるのに、それを置きざりにして行くように思われる。」と言うが、ソクラテスは、これに対してもソクラテスは自分の意見をまげなかった。

次にソクラテスは、「大切にしなければならないのはただ生きることではなくよく生きることだ。」と言いこれに基づいてアテーナイ人の許しを得ないでここから出て行く事は、正しい事か、それとも正しくない事なのかという問題について話しを続けていく。

「とにかく不正というものは不正を行う者にはどんなにしても、まさに害悪であり、醜悪である。」とか、「たとい不正な目にあったとしても、不正の仕返しをするということは行ってはならない」とか「国民の承諾を得ないでここから出て行くとするならば、それは何ものかに僕たちが害悪を与えていることにならないだろうか」等を述べ、その後はソクラテスが国法との対話を仮想して話を続けている。

これには、国法が「国法をお前の勝手で、一方的に破壊しようともくろんでるのではないか、判決が個人の勝手で無効にされ目茶苦茶にされたなら、国家は存在することができない。」とか「どんな場所においても国家と祖国が命ずることは何でもしなければならない。そうしなければこの場合の正しさが当然それを許すような仕方で説得しなければならない」という事に反すると言う。

又、ソクラテスが、国法等が気に入らないならば、自分の持物をもち何処へでも自分の好きなところへ出て行くことが、自由にできるのに、ソクラテスはいつもこのアテーナイにへばりついていたり、この国の中で子供たちをもうけたということは、ソクラテスは格別この国を気に入っていたという事になる。

つまり、このことは国法の命ずることは何でもするということを行動によって、国法に同意したことと同じことになる。それなのに、脱獄をするということは、三つの不正を犯していることになる。

一つは生みの親たる国法に服従しない、又、育ての親に服従しない。

最後に、国法に服従するということを約束しておきながら服従しないということは不正になる。

それに、もし脱獄をしたとすれば、ソクラテスはいやしくも国法を破壊するような者ならば、若い者や考えのない者を破滅に導くにきまっていると、裁判をした人たちの考えに裏づけを与えることになり、あの判決を下したのは正当だったと思われるようになるだろう等などを考えた結果、やはり、脱獄、逃亡するべきではないという結論をソクラテスは出し、友人クリトーンの厚い友情には、感謝しながらも、その願いをしりぞけ静かに毒杯をあおぐ道を選ぶことになった。というのが内容である。

「クリトーン」を読んだ感想としてはクリトーンが

ソクラテスを説得しようとして用いた言葉で、〝世間の評判〟があるが、本文中にも書いてあったが、大衆の者はささいなことでも、それがいかにも最大の事であるかというふうに言うことはあると思う。

ソクラテスはそのような事は、その場限りだと答え気にする必要はないと言っているが、本当に大多数の者の思わくを気にしないで生きていくことはできないと思う。それにできない事だとも思う。唯一できる人がいるとすれば、ソクラテスだけではないかと思う。自分の生き方の原則に従って生き通した人であるからこそ、そういう事もできたのだと思う。私はとうていソクラテスの生き方の原則に従うことはできない。

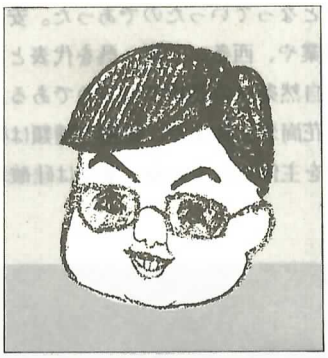
原則の一つにただ生きるのではなくよく生きるというのがあるが、よく生きるというのはたやすいが、実行する事は大変難しい事だと思う。

これができたソクラテスは、やはり凡人ではないなぁと思う。又、言う事だけは立派な人はたくさんいるが、ソクラテスのように口先だけでなくその他の面に対しても、自分の考え、決めた事などに忠実なのですごい人だと感じた。

郷土の自然

「芸南地域の花崗岩地形」

一般科目教官　佐々木　卓　也



(by　1A　森比良知子)

古代からの安芸国は、広島県の西半にあたる。水の都の広島デルタを育んだ太田川と支流の三篠川、さらには厳島に至る直線を北西の境とし、大竹市街から倉橋島南部に至る直線を西南に、倉橋島南部から三原城下を培った沼田川河口を南東に、沼田川から三篠川の発源地の大土山に至る直線を東北に区分する地域を、一般に「芸南地域」と呼んでいる。

この平行四辺形の地域には、中国山地の南縁にあたる山地地形と、日本のエーゲ海とも評される瀬戸内海に浮かぶ島嶼地形とによって、大小さまざまな地形が見られる。その中心が東広島市と呉市にあたり、わが呉高専の学窓から眺める景観がそれを代表している。地質についてみれば、いわゆる「瀬戸内面（低位面)」（海抜100～200m）には「広島型花崗岩類」が見られ、広島市から島根県方向と岡山県方向に広く分布し、県土の基盤岩となり有名な「花崗岩地形」を形成している。上部の「吉備高原面（中低面）」（海抜300～500m）一帯には、「高田流紋岩類」が広く分布している。この二つの火成岩類は、中生代白亜紀（約13,000～7,000万年前）に「広島変動」と呼ばれる 造山運動による火山活動の結果である。

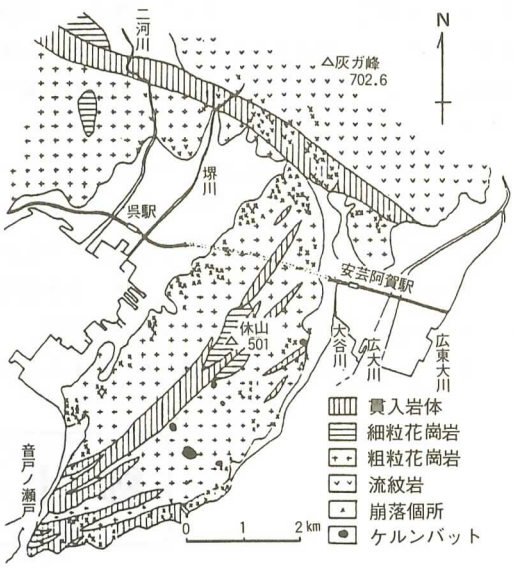
呉市周辺の地質を見れば、付図のように北方の灰が峰と東方の野呂山は、高田流紋岩によって形成され、山麓は広島型花崗岩となっている。境界部分は花崗岩特有の「節理面（規則的な割れ目）」に、花崗斑岩を主体とする二河複合岩脈が貫入岩体となり南北地形を画している。南方の休山周辺では、細粒花崗岩の下に粗粒花崗岩が形成され、節理面に沿って倉橋島から有名な音戸の瀬戸を通り呉越に至る音戸岩脈群の花崗斑岩が貫入を見せる。休山は典型的な断層地形の「地塁山地」で東側斜面には三段のケルンバット（残丘）が見られる。「地溝平野」の旧呉市街地と阿賀、広の低地は、すり鉢状の地形と化し、縁部の崖錐地形（山麓斜面）と沖積平野（堆積層）の対比が明瞭となり、二河川・堺川・大谷川は比較的に急流となっている。

昭和42年（1967）7月9日に発生した集中豪雨による山崩れは、夕方の2時間に恐異的な 110mmを記録し

（年間降水量は約 1,600㎜前後）、88人の尊い人命をうばった。これはすり鉢の縁にあたる崖錐地形たる花崗岩が、表層のみならず永年にわたり深層風化を生じていたためで、マサ土と化した上に土中の水が飽和状態となり、「土石流（鉄砲水）」となったのであった。これは宅地・道路・段々畑等の人工地形が、浸食・堆積の境界地点（遷急点という）を無視して拡大したためで、人災の可能性は大であるといえよう。豪雨時に呉線の列車が不通になる根本原因はこれである。

ところで芸南地域の花崗岩地形は、災害を発生させる要因となるけれども、我々人間に多大な恩恵をもたらせる。災害は水害の他に「山火事」が多発し、江田島や安浦等の人災は、人間の林野管理の不備が原因とされ、露岩の点在する山容は幾多の火傷を物語る。林野は殆んどがアカマツを主体とした林相で、十数年に一度の焼失をくり返すが、今でも日本一の「広島マツタケ」の主要産地である。山麓部の崩壊地には竹林が生じ、竹原市周辺ではタケノコが出荷される。春秋の珍味も「雨後の筍」や「やせ地の松茸」なのである。

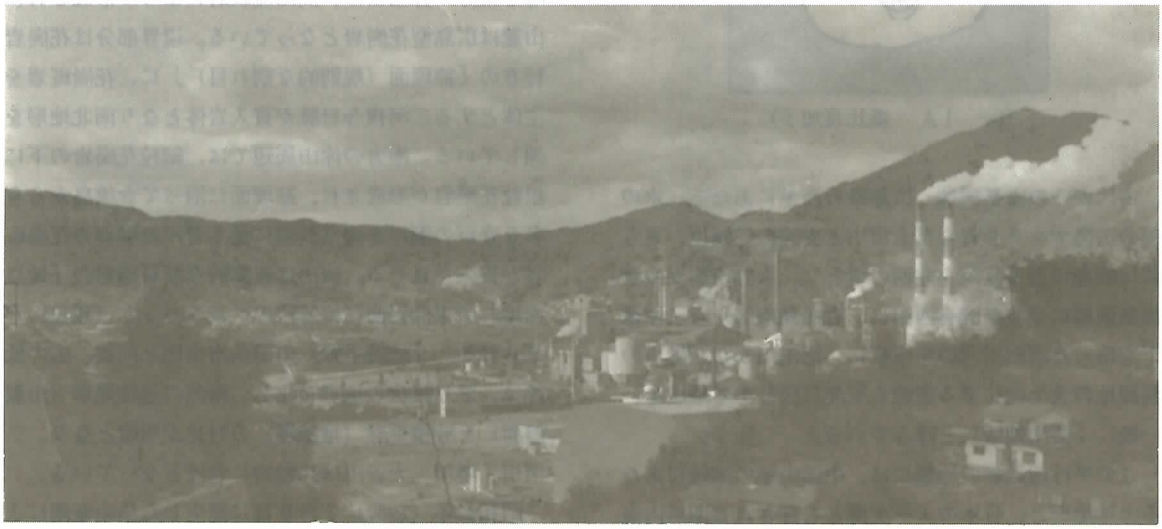
南部の島嶼地域には、かつて「除虫菊」の主要産地であったが、マサ土の特性により日本一の柑橘栽培地の一翼を担い、江能地域では都市型の商品作物が、安芸津町周辺ではビワが、竹原市周辺ではブドウが各々花崗岩地形の特色を生かして生産されている。白砂青松の海浜地域は、江戸時代より製塩が行なわれ、海水浴場と化した所もあるが、地形の複雑な点が良港と造



呉付近の地質と1967年の山崩れ

船王国・広島を世界的にした要因であろう。江戸時代以来の特産であった綿作は、内海の豊富な魚肥を必要とし、また安芸津町周辺のジャガイモ等も、花崗岩や流紋岩から得られる土壌と、瀬戸内海性の気候とにより主要産品となっていったのであった。安芸津町を中心とした窯業や、西条・三原・呉を代表とする酒造業もこうした自然条件の賜物であるのである。

ひと言に花崗岩と称すが、鉱物の種類は概ね石英・長石・雲母を主体としている。全ては硅酸塩を基本と



広方面より灰ケ峯、休山方面を望む

し、石英は水晶として各地に水晶山の地名が残る。長石は風化後は粘土と化し、風化流紋岩は良質の赤色粘土となり、壁土や安芸津町特産の瓦・タコ壺・レンガと化し、ジャガイモや柑橘類には良好である。熊野町には、雲母（キララ）川があり川底に反射光が生ずるほど良く産出した。花崗岩・石英斑岩・流紋岩は酸性火成岩で白色化するが、深成岩・半深成岩・火山岩の特性を良く現わし、大陸性火成岩である。

「広島の水は美味しい」と良く耳にする。これは風化土壌のマサ土でゆっくり口過され、「六甲の宮水」に近い弱アルカリの地下水であるためである。新生代に形成された「西条礫層（湖成層）」の分布する地域は、ことのほか良水に恵まれ美酒の「西の灘」の名を全国に轟かせている。米の品質もこれによっている。山間支谷を背景とした「集村」は良水を求めて集落が発達した結果で、熊野町・川尻町の毛筆や仁方のヤスリ、矢野のカモジや宮島の木工品等も人々が容易に生活できてこその立地条件なのである。

呉市域の二河峡・二級峡や音戸の瀬戸、東広島市域の東子滝や本郷町域の瀑雪滝、宮島町域の白糸滝等も奇岩名石の名勝として花崗岩地形の代表といえよう。山紫水明・白砂青松の芸南地域も、少し注意して観察すればもっと面白い事実が沢山発見できる。願わくば都会の人々は戸外に出て自然に親しんで欲しい。歴史的風土から人間の功罪を認知することも必要であろう。造船不況の折柄、開発か保全か自然と人間の共存共栄を明日の土地利用に、我々新人類への評価が下されるのである。もっと視野の広い人間形成を!!

参　考　文　献

○広島県：『広島県史・地誌編』，P. 1276（1977）
○鷹村權：「広島の地質をめぐって」，『日曜の地学・7』、P. 200（1979）、築地書館（付図参照）

随　想

「1840年待った ボアディシア王妃」

一般科目教官　石　井　淳　二

（by　5A　廣本　典幸）

通勤の時に、広島駅の北口を利用していると、構内に入る直前に、広場に立っている彫像によく気付く。それは二人の女性と一人のらっぱを吹く少年で構成されている、何か象徴的な群像である。朝であると、しばしば逆光を浴びてキラキラ輝いている。しかし、そのタイトルが「朝」であることは、ごく最近まで知らなかった。

この「朝」と題する彫像を目にする時、必ずボアディシア王妃の銅像が思い出される。それはロンドンのウエストミンスター橋のたもとに、正確に言えば、ヴィクトリア・エンバンクメント、つまり「テムズ河畔通り」の国会議事堂に面する場所に立っている。

ロンドン市内をそぞろ歩く時、決まって行き当たるものの一つに、「スクエア」と呼ばれる方形の広場がある。例えば、トラファルガー・スクエアやパーラメント・スクエアなどがそれである。そして、ロンドン人も旅行者も、歩き疲れたならば、どこかのスクエアのベンチに腰を下ろして、脚を休めることができる。目の前に咲いている色とりどりの花が、きっと目を楽しませてくれるであろう。古色蒼然たる大樹が、爽やかな緑陰を与えてくれる時もある。更に、必ず目に入

るものとして彫像があり、一体誰を記念して建てられたのであろうかと考えさせられる。

古代エジプト人は、巨大なファラオ像を建てた。また、古代ギリシャ人は、神々や人間の彫像を作って、アゴラを飾った。同様に、イギリス人も、多くの彫像、彫刻、記念碑、オベリスクなどでスクエアを飾っている。それらの数は、ロンドンの屋外だけでも 600余に上る。例えば、前述したパーラメント・スクエアには、六人の著名な政治家の銅像が立っている。彼らは、サー・ロバート・ピール、ビーコンズフィールド伯（ベンジャミン・ディズレイリ）、ダービー伯（エドワード・ジェフリー・スミス・スタンリー）、パーマストン子爵（ヘンリー・ジョン・テンプル）、イアン・クリスティアーン・スマッツ陸軍元帥、そしてサー・ウインストン・チャーチルである。

桂冠詩人ウイリアム・ワーズワースが、馬車に乗ってウエストミンスター橋を渡り、フランスのカレーへ旅立ったのは、1802年９月３日の早朝のことである。彼はこの時の印象を、あるソネットの中で、「大地は、これ以上に輝かしい光景を見せたことがない。…この都は、今美しい朝の衣をまとっている。」と詠んだ。深い静寂の中で、船、塔、丸屋根、劇場、寺院などが、朝日を浴びて、光り輝いていたのである。

試みにウエストミンスター橋を、南側から渡ってみよう。下にはジュリアス・シーザーが「タメシス」と呼んだテムズ川が、とうとうと流れているだろう。そして、左前方ではビッグ・ベンが、 320フィートの高さを誇っている。ピュージンとバリーによって設計された国会議事堂は、ゴシック様式の荘重な姿を見せている。また、左端のヴィクトリア塔は、ビッグ・ベンとよく調和していて、安心感を与えてくれる。テムズ川の水面に姿を映すこれらの建物は、まさにそのままで一幅の名画であると言えるだろう。

ボアディシア王妃の銅像は、前述したように、この橋を渡るとすぐ右側にある。二頭立ての戦車の上に。二人の王女を携えて。取るべき手綱はないが、右手には長い槍が握られていて、詩人ウイリアム・クーパーの言葉を借りれば、「復讐に燃えて」立っている。

所で、シェイクスピア劇で有名なシーザーがブリテン島へ侵入したのは、紀元前55年のことである。しかし、ロンドンの都市としての歴史は、第四代ローマ皇帝クラウディウスが、大軍を率いて侵攻してきた紀元43年から始まると言うことができよう。先住民族のケルト人がリン・ディン、即ち「湖沼の砦」と呼んでいたロンドンは、やがてローマ軍によって占領され、「ロンディニウム」と呼ばれるようになった。ちなみに、この時代のロンディニウムという町は、現在のロンドンの「シティー」と呼ばれる地域にほぼ一致すると言われている。

紀元60年頃、ブリタニアのイースト・アングリア地方を治めていた隷属王、イケニ族のプラサタガス王が亡くなった。彼には王位継承者がいなかったので、財

ボアディシア王妃の銅像

産の半分を二人の王女に残すように望んでいた。しかし、その願いはかなえられなかった。更に悪いことには、ボアディシア王妃は、財産没収に抵抗したかどで、笞打ちの刑に処せられ、王女たちは、辱めを受けたのである。

ボアディシア王妃は、ローマ軍兵士の暴虐に対して怒りを爆発させ、復讐を誓い、壮絶な反乱を企てた。彼女は近隣のトリノウァンテス族の支援を得て、南へ向かい、ローマ人が43年に建設していたカムロドゥヌム、即ちコルチェスターの町を、続いてヴェルラミウム、即ちセント・オールバンズの町を襲撃し、破壊した。彼女は更に南下して、ロンディニウムも攻撃した。住民は、年齢や性別にかかわらず虐殺され、建物は、放火によって徹底的に破壊されたのである。

ボアディシア王妃は、復讐を遂げることはできたが、最終的な勝利者にはなれなかった。ローマ総督スエトニウス・パウリヌスとの戦いに破れたからである。誇り高き王妃は、二人の王女と共に、自ら毒を仰いだという。

彫刻家トマス・ソーニクロフトによって製作された彼女の銅像は、1902年にその除幕式が行なわれた。その台座の正面には、「ボアディシア。別名ブーディカ。イケニ族の王妃。部族を率いて、ローマの侵略者と交戦後、紀元61年に戦死。」という言葉が刻まれている。

ボアディシア王妃は、再び彼女の勇壮な姿をロンドン人の前に現わすのに、1840年も待たねばならなかったのである。

図書館を訪ねて

「呉市中央図書館を訪ねて」

図書係長　土　佐　智　義

呉駅から蔵本通りを歩いて７～８分の所に、モダンなたたずまいの建物が見られる。これが昨年の11月１日にオープンした呉市中央図書館である。この建物は昭和61年度の呉市の優秀建築物に選ばれたように、一目でそれと分かる外観なので、その所在を知らなくても訪れることは容易である。建物の外観もさることながら、落ち着いた安らぎを与える空間もあり、早朝というのに児童からお年寄りまで多くの市民がつめかけ、ある人は新聞を、ある人は雑誌や書籍を熱心に読んでおられた。

幅の広いカウンターの中から印象の良い「いらっしゃいませ。」の挨拶に迎えられ、松本館長自らのお導きで館長室にて同図書館の特徴をお聞きした後、館内を見学させていただいた。

ご説明によると、大正13年に、当時呉の誇った海軍の援助のもとに設立された図書館は度重なる空襲ものがれ、澤原家から寄贈のあった明治中期以降の「芸備

ウェストミンスター橋南側から見るビッグ・ベン

日日新聞」を始めとした数種の貴重な新聞が原形で保存され、広く市民一般に公開されている。

蔵書の特徴として、郷土資料と海軍関係に他の図書館に見られないものがある。又、昭和61年度にはマリノポリス計画の関連もあって、1000万円の寄付を受けて海に関する資料を整備中とのことであった。さらに、最新の数年間分の特許公報、実用新案、意匠等の資料やCD、レコード等も備えられている。

資料の貸出も完全にコンピュータ化され、広、焼山地区ともOn-Lineで結び、どこの館で借りても、返却してもよい態勢が整えられつつある。各館の連絡も2日に1回行われ、借出もスムーズに行われるとのことであった。

利用対象者は呉市民及び呉市に通勤、通学する者ということなので、呉高専の学生、教職員は全員利用資格がある。皆さんも買い物帰りにブラリの感覚で是非一度お出かけ下さい。名前と住所の確認できるもの（保健証、免許証、学生証等）を持参すれば「利用者カード」の交付が受けられます。

「生涯教育」という公共図書館の持つ最大の機能を発揮するため、わずか9名という少人数で努力されておられるという印象を受けて図書館を後にした。

以下に、同図書館と利用の概要を記しておきますが、詳しくは下記でお尋ねください。

呉市中央図書館
〒737
呉市中央3丁目10-3　TEL 21−3014

1．利用の概要

開館時間　9：30〜20：00

休館日　1．月曜日（第1、第3日曜日の翌日は除く）及び第1、第3日曜日
2．国民の祝日
3．年末年始（12月29日〜1月4日）
4．月末整理日

貸出冊数　1回5冊以内

貸出期間　15日以内

年間利用者（昭和60年度）利用登録者　約7,500名
利用冊数　約215,000冊

2．建物の概要

一般閲覧室	703 ㎡	特許公報室	81 ㎡
読書室	87 ㎡	集会室(3室)	217 ㎡
書庫(2層)	846 ㎡	その他	2,085 ㎡
		合計	4,019 ㎡

所蔵可能冊数　約30万冊

蔵書　約14万冊（61.3.31 現在）

年間増加冊数　約1.3万冊（昭和60年度）

一般開架コーナー

「図書館業務電算化のその後」

図書主任　藤井　健

「図書だより」15号で、図書館業務の電算化の目的、システム構成、ハードウェア構成などの構想を紹介しました。その後の動向は、62年度予算で“親機”となる事務用電算機の導入が決定し、いよいよ現実のものとなってきました。

事務部の多岐にわたる業務の中でも、図書館業務はその80%以上が電算処理可能で、電算化の最も大きな恩恵を受ける部門です。開校以来23年を経て、校内の蔵書も6万冊を越え、毎年数千冊づつ増加しており、学生への貸出も年間5千冊以上です。この増え続ける図書の事務処理や管理を、従来の人手だけに頼るシステムで行なうと、時間もかかるし、どうしてもミスが生じ、これまでも利用者に迷惑をかけることがありました。これを根本的に改善し、利用者へのサービス向上を目標にして、電算化に着手しました。

具体的には、昨年3月に購入した事務用電算機の図書係分専用端末機2台と、学生課分1台の3台をフルに使い、図書委員の鈴村先生の指導により、今年の電気工学科の卒業研究「図書館情報システム（仮称）の開発」として、ソフトウェア開発に入りました。卒研チームは、九工大へ出向いたり、休日返上もいとわず、熱心かつ精力的に取り組まれ、当初目標とした、貸出・返却業務のソフトウェア開発を予定通り完了しました。現在事務部で行なっている開架分のデータ入力が終れば、貸出・返却などの閲覧業務の電算化の第一目標は達成される見通しです。

小さい所帯の少ない予算で、電算化を図ろうとするため、規模の大きな図書館並みのことを望むことは到底できませんが、皆の知恵と協力によって少しでもよいものにしたいと念じております。その後の報告とともに鈴村卒研チーム（5E阿部哲士君、井口直樹君、嶋本健一郎君、竹井弘樹君）のご支援に対し心からお礼を申し上げます。

寄贈図書のお知らせ

昨年8月26日、本校初代校長葛西重男先生がご逝去されたことは、先の「図書だより」15号の西校長の追悼文によって、皆さんもご承知のことと思います。その後ご遺族から、想い出深い呉高専に図書を寄贈したいので選ぶようにとのお申し出がありました。図書委員会として、学科の枠を越えて利用されるもので、最新のしかも基礎的なものという条件で下記の辞典類を選定しました。既に全冊入荷し、閲覧室の開架棚の辞典類のところに配置しましたので、大いに利用してください。皆さんともども、お礼を申し上げ、先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

最新科学技術用語辞典（全3巻）　三修社
図解コンピュータ百科辞典（江村潤郎）　オーム社
マイクロコンピュータ辞典（C. J. Sippl）　共立出版
コンピュータ英和・和英辞典（日本ユニバック）　共立出版
情報処理用語3200和英編（工業英語編集部）　インタープレス

利用案内シリーズ　3

書名目録と著者目録の利用方法

①カードの並び方の基準

目録カードの並び方（以下、配列という）は書名目録も著者目録も、基本的には以下の順になっています。

1．五十音順

通常、カードの上部に片かなで表記されるが本校では昭和60年度から行っていないので、書名や著者名の読みを頭で描きながら探してください。（昭和59年度以前もアルファベットで表記）。

清音、濁音、半濁音の順に配列してあるので、電話帳を見慣れた人には探しにくいかも知れません。

たとえば、カ→ガ、　ハ→バ→パの順です。ですから、カードケースの外に表示してあるカナを良く読んで目的のカードを探してください。又、長音符（ー）は無視して配列してあります。

2．字順

配列は字順（文字の順で語の順ではない）になっています。

例）　電気工学の基礎　→　電気の理論　→
　　電気理論・計測

3．同一配列順位

カードが同じ配列になるときは、書名や著者名に使用されている文字の、片かな、平がな、かなまじり、漢字（字数の少ないものから多いものへ、字数の同じ場合は第1字から順次字画数の少ないものから多いものへ）、ローマ字等の順に配列してあります。

②　書名目録

1．①3で説明したようにカードの並びが同じ場合は次のようになっています。

例）

ツレズレグサ	つれづれぐさ
ツレズレグサ	つれづれ草
ツレズレグサ	つれづれ種
ツレズレグサ	徒然草
カガク　ノ　ジテン	化学の事典
カガク　ノ　ジテン	kagaku no ziten

2．同一標目

同一標目（同じ表示の書名）のなかは、著者表示の著者名、出版者名、叢書名の順に配列してあります。

例）　夏目　漱石

荒正人著
江藤淳著
江藤淳著　角川書店
江藤淳著　講談社
（講談社文庫）
江藤淳著　講談社
（ミリオンブックス）

③著者目録

1．字順配列

人名の姓と名はおのおの1単位として配列してあり、②2で例示したのとは少し異なりますので注意してください。

2．同一配列順位の姓

姓が同一配列順位となるときは、名の順になっています。

例）

アベ、コウボウ	安部公房
アベ、トモジ	阿部知二
アベ、ヨシシゲ	安倍能成

3．同一配列順位

①3で説明してあるが、次の例を参照してください。

例）

カワムラ、アイコ	川村アイ子
カワムラ、アイコ	川村あい子
カワムラ、アイコ	川村愛子
カワムラ、アイコ	河村アイ子

4．同一著者

同一著者のなかは、書名、出版者名、叢書名の順に配列してあります。

例）　夏目　漱石

草枕
漱石全集
坊ちゃん

なお、新書、文庫、消耗品扱いの図書は昭和60年度以降に受け入れたものについて書名カードが配列されているだけで、他の目録が無い場合が多いので注意してください。

以上、大まかに本校の目録カードの配列について説明しましたが、詳しい説明、及び不明な点については係の者にお尋ねください。

この記事を書くにあたって、「日本目録規則　新版予備版」（日本図書館協会）を引用しました。

【訂正】

第15号の利用案内シリーズの記事のうち誤りがありましたのでお詫びして訂正致します。

	誤	正
P．16　右欄1行目	書　名	著　者

P．17　「図5　カード目録の記載例」は下図と入れ替えてください。

①図書
②501.2 ⑥工業力学の基礎 ⑦竹之内博次著 ⑧改訂新版
③T　⑨東京　⑩啓学出版　⑪1984(3刷)
⑫223p ⑬21cm ⑭(だれでもわかる解説と演習)

④ 59030
⑤ 1,620円　○

(注) 通常⑨の出版地が東京23区内の場合省略してあります。

①所蔵箇所　②分類記号　③著者記号　④登録番号　⑤購入価格　⑥書名　⑦著・編者名　⑧版表示　⑨出版地　⑩出版者(社)　⑪出版年(刷数)　⑫ページ数　⑬大きさ(本の高さ)　⑭叢書名

新着図書案内

(昭和61年8月～12月受け入れ図書室備付分)

＞0　総　記＜

情報理論　(笠原正雄等)　昭晃堂
情報ネットワークシステム　(久慈　要等)　岩波書店
電脳都市　(坂村　健)　冬樹社
人工知能とはなにか　(白井　良明)　岩波書店
図解コンピュータ用語辞典
(情報処理用語研究会編)　日刊工業新聞社
COBOL　1　(基礎編)
(COBOL 言語研究会編)　酒井書店
基礎グラフィクス　(川合　慧)　昭晃堂
FORTRAN 77によるプログラミングの基礎
(馬籠良英等)　〃
FORTRAN 77　(水谷　芳史)　理工図書
演習C言語　(松田　稔)　日刊工業新聞社
Prolog と論理プログラミング
(中村　克彦)　オーム社
世界の大学図書館めぐり　(田辺　広等)　雄松堂出版
平凡社　百科年鑑　1986　平凡社
日本大百科全書　11～13　小学館
The　日本　講談社
新聞報道のあり方　(生田　正輝)　慶應通信
朝日選書　朝日新聞社
308：科学と芸術の間
309—310：漢字の話　上・下
311：詩人のノート
312：ドイツ歴史の旅
313：男の家政学
314：私たちの中のアジアの戦争
315：素粒子の謎を追う
316：見よ，旅人よ
岩波セミナーブックス　岩波書店
18：資本論を物象化論を視軸にして読む
19：「維摩経」を読む

＞1　哲　学＜

新・岩波講座　哲学
16：哲学的諸問題の現在　(滝浦静雄等)　岩波書店
実存哲学への道　(山下　太郎)　公論社
哲学とは何か　新装版
(カール・ヤスパース)　白水社
笑うニーチェ
(タルモ・クンナス)　〃
現代基礎心理学　東京大学出版会
2：知覚　1　(相場　覚編)

3：知覚　2　（鳥居修晃編）
4：記憶　（小谷津孝明編）
5：学習　1　（佐々木正伸編）
6：〃　2　（佐藤方哉編）
7：思考・知能・言語　（坂元　昂編）
8：動機・情緒・人格　（浜　治世編）
9：発達　1　（糸魚川直祐編）
10：〃　2　（鹿取廣人編）
色彩の力　（デボラ　T.シャープ）福村出版
現代人の宗教　御茶の水書房
1：親鸞と日蓮　（丸山照雄等）
2：源信・法然・道元　（山崎正一等）
5：求道と人間　（阿満利麿等）
8：現代の禅　（大森曹玄等）
ガンダーラの美神と仏たち（樋口　隆康）日本放送出版協会
道元に出会う　（岩田慶治等）旺文社

＞2　歴　史＜

カラーイラスト世界の生活史　東京書籍
3：古代ギリシアの市民たち（ピエール・ミケル）
4：ローマ帝国をきずいた人々　〃
国史大辞典　第7巻
（国史大辞典編集委員会編）吉川弘文館
NHK歴史への招待　31　日本放送出版協会
古代日本の人間像　1　（青木和夫等）学生社
清和源氏　（龍谷　寿）教育社
愚管抄を読む　（大隅　和雄）平凡社
平城京　（田中　琢）岩波書店
安芸　毛利一族　（河合　正治）新人物往来社
昭和史の軍部と政治　1～5
（三宅正樹等編）第一法規出版
シルクロード考古学　第2巻
（樋口　隆康）法蔵館
ベトナム秘密報告　上
（ニューヨーク・タイムス編）サイマル出版会
インドネシア歴史と現在
（ジョン　D.レッグ）　〃
弁慶の謎　（菊村　紀彦）大和書房
義経の謎　（　〃　）　〃
日系インドネシア人　（栃窪　宏男）サイマル出版会
二つの祖国を生きた　（　〃　）　〃
地球の歩き方　1～13　ダイヤモンド社
1：ヨーロッパ　（「地球の歩き方」編集室編）

2：アメリカ
3：インド
4：オーストラリア
5：ハワイ
6：中国自由旅行
7：東ヨーロッパ
8：メキシコ・中米
9：旅の6か国語会話集　改訂版
10：ヨーロッパのいなか
11：モロッコ・アルジェリア・チュニジア・北アフリカ
12：東南アジアA　タイ
13：パリとフランスのすべて
地図編集 100年の歩み
（建設省国土地理院編）日本地図センター
ニッポン英語ガイド　（五十嵐昭人）南雲堂
角川日本地名大辞典　角川書店
36：徳島県
45：宮崎県
田吾作、アフリカを行く　（永瀬　忠志）立風書房
広島県風土記　（渡辺則文等監修）旺文社

＞3　社会科学＜

岩波ブックレット　岩波書店
65：もういや「お国のために」には　ガラスの
うさぎを溶かさないで
66：ほろびゆくブナの森
67：平塚らいてうと日本の近代
68：軍事費を読む
69：「戦場にかける橋」のウソと真実
70：有料化老人ホームどこが居よいか住みよいか
71：ネパールの「赤ひげ」は語る
72：子どもの権利とはなにか
英和対訳日本人の国際感覚
（ロイ・ロックハイマー）講談社
東南アジアの日本批判　（渋沢雅英等編）サイマル出版会
東南アジア五つの国
（チャールズ　E.モリソン）　〃
シンガポールの成功　（谷沢慎一郎）　〃
日本を見つめる東南アジア（渋沢雅英編）　〃
シンガポールの知恵（S.ジャヤクマール編）　〃
宇宙的ナンセンスの時代　（宮内　勝典）教育社
異文化体験のすすめ　（松尾　大等）大阪書籍
中国の開放経済　（村田　泰夫）教育社
男女雇用機会均等法　（荻原　勝）　〃
ニューメディア最新事情　（加藤　靖紀）　〃
米ソ首脳会談　（篠田　侑尚）　〃
宰相論　（勝田吉太郎）講談社

日本が叩き潰される日　(落合　信彦) 集英社
東南アジア政策　(矢野　暢) サイマル出版会
ヒロシマ爆心地
(NHK広島局・原爆プロジェクト・チーム) 日本放送出版協会
判例辞典　増補　(中川淳等編) 六法出版社
憲法　(阿部照哉編) 同文館出版
憲法判例百選　1～2　(芦部信喜編) 有斐閣
暮らしの法律相談　(法制研究会編) 金園社
家庭の法律百科　1～2　学習研究社
国際条約集　1986年版　(横田喜三郎等編) 有斐閣
経済新語辞典　1986　日本経済新聞社
ポケット日本経済辞典
(神戸大学日本経済研究会編) 有斐閣
単一目標・多目標システムにおける線形計画法
(J.P.イグナチオ) モデリング研究所
日本はこう変わる　(長谷川慶太郎) 徳間書店
経済白書　昭和61年版　(経済企画庁編) 大蔵省印刷局
世界の中の日本
(NHK日本プロジェクト取材班編) 日本放送出版協会
華僑・見えざる中国
(ガース・アレキサンダー) サイマル出版会
世界が見える日本が見える (大前　研一) 講談社
危険管理の時代　(牛場　靖彦) 学生社
人間関係に強くなる本　(松本　順) 大和出版
人間関係で仕事は伸びる　(坂川山輝夫)　〃
必ず説得できる本　(渋谷　昌三) 日本実業出版社
トップが望む社員像　学生社
日本人と働く法　(日本貿易振興会)　〃
対日売込作戦　A to Z　(通商産業省編)　〃
日本統計年鑑　第36回　昭和61年
(総務庁統計局編) 日本統計協会
マスコミの明日を問う　4　大月書店
なにかが生まれる日　(宮城まり子) 日本放送出版協会
ヘロイン　上・下
(アルフレッド　W.マッコイ) サイマル出版会
日本的サラリーマンの行動学
(高辻　正基) 学生社
日本の若者　(NHK世論調査部編) 日本放送出版協会
インドネシアの民俗 (リー・クーンチョイ) サイマル出版会

＞4　自然科学＜

息け数学者の記　(小平　邦彦) 岩波書店
理科年表　第60冊　(東京天文台編) 丸善
非線形制御システムの解析 (平井一正等) オーム社
電磁気学演習　1　(西原　浩等) 朝倉書店
プラズマ工学の基礎　(A. von Engel) オーム社
学生化学用語辞典　増補版
(大学教育化学研究会編) 共立出版
燃料電池とその応用　(小澤丈夫等) オーム社
朝日コスモス　1987年版　朝日新聞社
地形図集　(建設省国土地理院編) 日本地図センター
バイオテクノロジー入門　(篠原昭等編) 培風館
21世紀バイオ社会からの報告
(N.コールダー) 岩波書店
SALUTIS　WHO世界健康百科　1～10 同朋舎出版
スポーツの栄養・食事学　(鈴木　正成) 同文書院

＞5　工　学＜

技術者のための音響工学　(早坂　寿雄) 丸善
だれにもわかる最新ハイテク事典　新素材
(通産省ハイテクグループ編) オーム社
ファインセラミックスの実際知識
(素木　洋一) 東洋経済新報社
マツダのCAD / CAM　(高橋昭八郎編) 工業調査会
先端技術利用　(星　満) 日刊工業新聞社
現代の技術と社会　(日本科学者会議編) 青木書店
技術開発の昭和史　(森谷　正規) 東洋経済新報社
科学の最前線　(日野啓三編) 学生社
独創は闘いにあり　(西澤　潤一) プレジデント社
「十年先を読む」発想法　(　〃　) 講談社
エネルギー管理士試験を受ける人のために
(熱管理技術研究会編) オーム社
ハイテク災害　(剣持　一巳) 日本評論社
建設白書　昭和61年版　(建設省編) 大蔵省印刷局
新体系土木工学　技報堂出版
80：海岸・港湾調査法　(合田良実編)
土木学会規準　昭和61年版
(土木学会コンクリート委員会編) 土木学会
コンクリート標準示方書　昭和61年制定
(土木学会コンクリート委員会編)　〃
設計編
施工編
舗装・ダム編
レオンハルトのコンクリート講座
1：鉄筋コンクリートの設計

(F・レオンハルト等) 鹿島出版会
土留擁壁の設計 (高木秀夫等) 鉄道現業社
水と人間の共生 (大崎　正治) 農山漁村文化協会
日本のダム開発 (森　薫樹等) 三一書房
汚泥研究年報　1981 環境技術研究会
公害振動の予測手法 (塩田　正純) 井上書院
ＳＤ選書
202：椅子のデザイン小史 (大廣　保行) 鹿島出版会
現場マンのアイデア発想 (合原　一夫) 学芸出版社
G.A.Houses　世界の住宅 A.D.A.Edita Tokyo
20：Japan　3
住宅の照明 学芸出版社
実用ヒートパイプ
(日本ヒートパイプ協会編) 日刊工業新聞社
電気材料物性工学 (日野　太郎) 朝倉書店
現場のＰＴ・ＣＴ技術 (河村　博) オーム社
魔法のスイッチ　サイリスター
(柴崎　功) 誠文堂新光社
LANとVANの知識 (久保　勲等) オーム社
ガラスあ (ＨＯＹＡ編) 東洋経済新報社
磁気記録の理論 (西川　正明) 朝倉書店
超電導エネルギー入門 (増田正美編) オーム社
電話機を買う前に読む本 (和多田作一郎) 誠文堂新光社
光ファイバの実験と工作 (大久保　忠) 日本放送出版協会
コンピュータ英語ハンドブック
(三島　浩) 共立出版
ディジタル制御システム (B.C.クウ) ＣＢＳ出版
上巻　下巻
演習問題集
基礎自動制御 (相良　節夫) 森北出版
ディジタル制御 (高橋　安人) 岩波書店
電子回路基礎講座 オーム社
2：トランジスタ回路　1　改訂2版
1 (時田　元昭)
3：トランジスタ回路　2 (渡辺　和也)
4：パルスとディジタル回路　改訂3版
(小柴　典居)
メカトロニクスとマイコン　1～2
(武藤　一夫) 工学図書
太陽電池とその応用 (桑野　幸徳) パワー社
VLSI とコンピュータ (相磯秀夫編) コロナ社
エレクトロニクスデバイス活用技術 工業調査会
光技術の応用 (吉田　進) 産業図書
考える一族 (内橋　克人) 新潮社

＞6　産　業＜

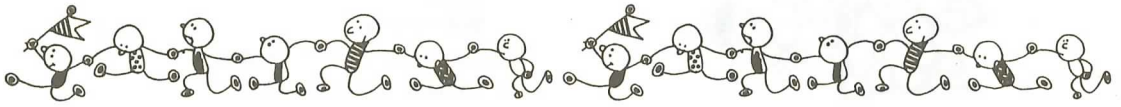
ロボット産業地図 日刊工業新聞社
国鉄「民営分割」への挑戦 (高野　邦彦) ダイヤモンド社

＞7　芸　術＜

岩波美術館テーマ館第7室 (柳宗玄等編) 岩波書店
絵画の発見 (小松和彦等) 平凡社
油絵入門 (伊藤　継郎) 保育社
マスコミのイラストレーション
(長尾みのる) 美術出版社
世界の絵本ポスター (青木久子編) 偕成社
イラストレーションの制作 (新井　苑子) 美術出版社
カーイラストレーション (松本　秀實) 〃
イラストレーションの実際 (横山　明) 〃
やきもの制作の実際　改訂 (渡辺　輝人) 理工学社
カラー・イメージ感覚 (小林重信等編) 講談社
凧になった飛行機 (後藤　脩平) 誠文堂新光社
レッド・ツェッペリン物語
(スティーヴン・ディヴィス) CBSソニー出版
ビートルズの心 (福田昇八等) 大修館書店
勝負の瞬間 (山下　泰裕) リクルート出版部
運動医学 (岡　正典等) 金芳堂
コーチングの科学 (福永哲夫等) 朝倉書店
オリンピックの本 (伊藤　公) サイマル出版会
ドーバー海峡泳いじゃった！
(大貫　映子) 新日本出版社
空手に燃え空手に生きる (芦原　英幸) 講談社
目で解く上達囲碁格言 (石田　芳夫) 誠文堂新光社

＞8　語　学＜

ザ・ニホンゴ
(石川島播磨重工・広報部編) 学生社
現代用語の基礎知識　'87 自由国民社
中国語　初級コース (平井　勝利) 白帝社
中国語　中級コース 〃 〃
写真で入門やさしいハングル
(呉　俊東等) 南雲堂
和製語から英語を学ぶ (脇山　怜) 新潮社
英語なんて朝めし前
(イアン・マッカーサー) 講談社



＞9　文　学＜

古事記の世界観　(神野志隆光)　吉川弘文館
ぼくたちの好きな戦争　(小林　信彦)　新潮社
武蔵坊弁慶　1～10　(富田　常雄)　講談社
間宮林蔵　(吉村　昭)　〃
花渡る海　(　〃　)　中央公論社
島が好き海が好き　(河田真智子)　新潮社
馬車は走る　(沢木耕太郎)　文藝春秋
完訳　日本の古典　小学館
6：万葉集　5
8：日本霊異記
19：源氏物語　6
31：今昔物語集　2
昭和文学全集　〃
5：川端康成・横光利一・岡本かの子・太宰治

岩波新書　岩波書店
327：「文明論之概略」を読む　下　(丸山　真男)
344：世界経済をどう見るか　(宮崎　義一)
345：性の源をさぐる　(樋渡　宏一)
346：文化大革命と現代中国　(安藤正士等)
347：短編小説礼讃　(阿部　昭)
348：歌い来しかた　(近藤　芳美)
349：江戸の旅　(今野　信雄)
350：古語雑談　(佐竹　昭広)
351：プロ野球審判の眼　(島　秀之助)
352：ガン遺伝子を追う　(高野　利也)
353：美の近代　(粟津　則雄)
354：ゴマの来た道　(小林　貞作)
355：貿易摩擦の社会学　(R.P.ドーア)
356：子どもたちの太平洋戦争　(山中　恒)
357：花と木の文化史　(中尾　佐助)

岩波ジュニア新書　岩波書店
114：オスとメス　求愛と生殖行動　(小原　嘉明)
115：脳のメカニズム　(伊藤　正男)
116：宇宙人はいるだろうか　(水谷　仁)
117：日本のなぞなぞ　(鈴木　棠三)
118：いきいき体調トレーニング　(正木　健雄)

カラーブックス　保育社
707：健康食品入門
708：煎茶席の花
709：森林浴入門
710：糖尿病
711：絵のある博物館
712：おもいでの都電
713：足立美術館
714：博多　味どころ
715：スポーツ医学　1
716：クルマ趣味入門
717：歯の病気
718：駅弁

寄贈図書

書名	者贈者
高年齢労働者の労働問題	広島修道大学総合研究所
詫間電波四十年史	詫間電波工業高等専門学校
豊橋技術科学大学十年史	豊橋技術科学大学
日本国際賞　1986	(財)国際科学技術財団
物語・建設省戦後営繕史の群像〈中〉	建設省

編集後記

本号では学生の皆さんから10編、先生方から2編の読書感想文、随想等を掲載しました。

「読書感想文」では2編が偶然同じ本の感想文になりましたが、年令により読み方が多少異っている様です。2年生の4編は「倫・社」の夏休暇課題の中から岩根先生に選んでいただきました。これも同じ本を読んでの感想文です。タイトルは各自でつけた副題をそのまま使いました。

「随想」は、昨年の夏、石井淳二先生がイギリスへ行かれたとお聞きし、お願いしました。次号には4月からドイツへ留学される岩根先生からのお便りを掲載する予定です。

(小山記)